

の仕事がされた。昭和十九年十二月ご家族六人でルソン島北部の山に逃げ入り、そこで弟さんを亡くすという悲惨な体験をなさっています。お父様も現地召集され戦死されています。

何とか郷里の広島に引き揚げ、昭和三十年東京に出られたときに、渋谷の我が家に兄を訪ねて見えられませんでした。その後、度々お会いする機会がありました。この度礎の原稿をお願いしたところ、私の履歴書前編（A5判八十二ページ）と題したものを送ってくださいました。何と彼は着実に計画をたて、一生悔いなく過ごすための努力をされておられました。この小冊子には十二歳までしか過ごしていなかったマニラ時代の例えば、小学校のこと、友達のこと、近所のこと、毎日の出来事、お菓子、果物に至るまで克明に記されているのです。引揚げ直後ならいざ知らず、五十年経った今日に著したものです。私は敬服すると同時に懐かしく思い出させていただきました。

昭和三十一年フィリピン貿易を専門にしていた会社就職されて以来四十年。

現在は、定年後、健康を管理されている最愛の奥様と二人の御息、二人のお孫さんに囲まれて履歴書後編等書かれるゆとりある人生を歩まれている由。今日のお幸せは十二歳の時までに極限のご苦勞を味わい尽くされた賜物ではないでしょうか。

（東京都引揚者団体連合会

常務理事 大平 禮子）

## 北部ルソン山岳地帯逃避行

東京都 北島 華江

昭和十九年十二月、当時私は数えて二十歳でした。

が、六人兄妹の末っ子で、今、思い返しますと非常に世間知らずで、幼なかつたようです。父東寶隆はフィリピンルソン島にある禅宗の曹洞宗（福井県、永平寺が大本山と聞かされておりました）南天寺の二代目住職で、私が一歳半のとき、病没。長兄が跡を継いでおりました。その兄賢重も現地召集で軍籍に在り、当時、

寺は母（私は母が四十歳のときに生まれた子です。当時六十歳でした）と兄の妻、その子供たち（幼稚園前の長女を頭に長男、次女、計三人）、三歳年上の姉、そして私の七人で守っており、中村トシオさんと言う檀家の御子息が寺のことを手伝ってくださっています。

トシオ氏はマニラ日本人小学校第十五回卒で、憲兵隊の通訳をしておりました。寺の中に起居し、寺から勤務先へ通っておりました。米軍の攻撃も激しくなり、そのトシオ氏一人に寺のことを頼んでマニラを後にいたしました。疎開とかマニラ脱出とか、そのような言葉を使ったと記憶しております。私ども、七人のほかに、長姉の家族六人も加わり、総勢十三人でした。長姉の主人は確か軍属として軍と行動を共にして、長姉が十四歳の長女を頭に次女、長男、次男、三女の五人の子供連れでした。家族の人数にこだわりましたのは、敗戦後、日本に引揚げ得たのは、私と、すぐ上の姉と、姪一人の三人のみでした。三人以外の身内の者たちは、次々に不帰の客となり、今もその遺骨は北

部ルソンの山波の彼方遙かに永遠の眠りについております。どのようにして、故国へ連れ帰ることができのでしょうか。思い出とともに常に断腸の極みです。

寺の境内に、軍のトラックが迎えにきました。今も、とても不思議に思うのですが、邦人のマニラ脱出は、トトバン駅から鉄道で移動したとか、バリントワックのビール工場に集合してトラックで北上したとか、種々な方法であったようです。一体、どなたが計画をおたてになりましたのでしょうか。あの時点で既に秩序は乱れ始めておりましたのでしょうか。それにいたしましても、その先に地獄のような逃避行が待っているとは夢にも思わず、一時的な疎開なので、邦人が一人でもマニラに残っていると、兵隊さんが思う存分、戦えないから協力しなければいけない。これは拒むことのできない軍命であると、そのような御達しでした。幾つかの村や町を走り抜け、サンホセで降ろされました。私の不確かな記憶では、住む家が不足なので馬小屋で寝起きしているとか、情け無い情報も小耳にしました。しかし運良く、マニラの天野産院のご家族の

傍らに場所をいただいで、ほんのちょっとした間、落ち着きました。しかし、サンホセも空襲に見舞われ、すぐに少し北上して、バヨンボンへ移動しました。

ここでは、一応一戸建ての民家でした。お向かいにガバナ（知事のことでしょうか）の大きな住宅があり、いかなる御縁でありましたか、いまだに不思議の一つなのですが、私と同年代か少し年上かの娘さんが、とても親切に優しく接してくださって、時々夕食に呼んでくださいました。その夕食の席で、初めてお目にかかったのが北屋敷房子さんでした。実に美しい英会話をなさっておられて、私はきつとミッシヨンスクールの英語の先生に違いないと、勝手に思い込んでおりました。さて、このバヨンボンも空襲され、また、北へと移動でした。

ボンファルでは、それでもしばらく平穏でした。私の記憶では、この地点で、村が形成されたと思います。高千穂村、大和村、瑞穂村、日向村の四村で、村長、助役は領事館や日本人会の方々が当たっておられたようです。ちなみに、南天寺の東一家は、高千穂村に組

み入れられました。村長、平井氏、助役、松本先生、もう一人書記のような立場の方がおられました。金貨メリヤス株式会社社員の白垣氏でした。各村で炊事係がおられ、私どもの属した高千穂村では、丸玉とかいう軍のお抱えのキャバレーの爺やさんが御飯炊きをして、ホステスのお姉さんたちが手伝っておりまして。「メシアゲ！」と大声で叫んで食事を取りにくるよう、知らせてくれました。各家から器を持ってもらいに行きました。

そのころだったと思います。三月十日（昔の陸軍記念日）がくると、日本軍が逆転してマニラへ帰れるとか、四月二十九日（昔の天長節）がくると、云々……とか夢のような噂を耳に致したものでした。事実はまるっきり反対でした。このボンファルでのしばしのささやかな、平和もやがて破れました。

少人数ずつ北上移動が始まったのに、ここで私は盲腸を患ってしまいました。激しい腹痛、高熱、下痢に苦しみ、私は取り残されてもいい、もうほっといて欲しいと言いながらも、何とか第一レストハウスとか、

ファームスクールとか竹藪の地点まではたどり着きました。その地に設営されていた、第十二陸軍病院の田坂巖軍医大尉の執刀で手術を受け、一命を取り止めました。

戦後、引き揚げてからの話ですが、確か昭和三十一年ごろでした。田坂先生が山口県方面の病院で院長をなさっておられ、学会で上京された折、お会いする機会に恵まれ私は「あの厳しい状況の中で救っていただけで先生は命の恩人です」と感謝の言葉を申し上げましたところ、「それは違う、自分は軍命に従ったまでだ」と前置きの後、事の真相を話してくださいました。

当時、乏しい衛生器具、材料の中、戦傷病兵の急増で、一在留邦人の面倒を見る余裕も無かったのので、手術を行うことを拒否したが結局、貴重な消毒済のメスを使うことになったのは、兎玉閣下の命令があったからだ。あなたが感謝すべきは、事を運んだ人々に対してすべきであって私にはない……」そのような話でした。日本病院の医師であった石川七郎先生や医師

である次兄のことが脳裏をかすめました。昼間は敵機が空から襲ってきます。日本軍の制空権は皆無でした。盲腸の手術は月の明かりを頼りに原っぱで行われました。麻酔無し。患者は「殺してくれ！」と叫んで気絶。付き添ってくれたすぐ上の姉もその場で失神。

「貴様、棺桶の中に片足突っ込んでおったんだ」とまるで傷病兵に語りかけるような田坂大尉の野戦病院の会話ながら一種の温かみを感じ始めて、今、生かされていることを知りました。毎日包帯交換の回診を受け、間もなく抜糸というときに、この野戦病院目掛けでの大空襲があり、病院全体の移動が決定したようでした。大尉殿は、幼稚園児のお弁当箱ぐらいの包みを私に手渡しながら「貴様、軍に属していないので、処置組に入れることはできない。これはリバノールガーズだ。明日からは自分でやれ。できる限り生き抜くように……」何の意味か理解できずポカンとたたずむ私と姉の前から大尉殿は消え去りました。

姉は両足共、なえて歩行困難な妹を抱えて、何とかして足を確保せねばと、東奔西走して、運良く同盟通

信の宇佐美氏を、あのこった返し状況の中で見付けました。見付けたというよりも、人間以上の力の働きに恵まれて、引き合わされた私は今でも宗教的なものを感じております。宇佐美氏は翼部隊（通信隊）の輸送トラックの責任者の立場におられたようでした。お陰で民間人であるのに軍のトラックに便乗させてもらいました。

日中は林の中にトラックを隠し、皆、空襲を避けて三三五五空から見えない場所を探して待避します。日が落ちてから行動を起こします。その夜は激しいスコールで山道は状態不良で、ハンドルを持つ兵隊さんは苦勞していました。そしてついに右後部車輪をぬかるみに取られ路肩を崩しながら、逆さに千尋の谷へとトラックは落ちてしまいました。盲腸のときの命拾いが第一の死線越えなら、このトラック事故は第二の死線越えでした。大きな力に守られたとしか説明できません。底の見えない深い谷の途中に大きな岩が突き出していて、そこにトラックは引っかかって止まったのでした。

大きな骨折や打撲で致命的な負傷を受けた人々は、

安楽死を希望しました。このことは二十歳そこそこの社会人として経験が浅く、また、薄い私には大きなショックでした。以後、笑うことを忘れました。二泊三日ほどかかってキャンガンに着きました。私たちはそれでも無事でだけ一人欠ける者もなく、姉と私は、竹藪の空襲で死亡したと思っていたようでした。頼りになる若者のはずだった姉と私が半病人の弱々しい姿で、先発の家族と再会はできました。しかし心理的には、お互い複雑なものがあつたようです。村を構成して幾らかでも秩序があつたボンファルの生活とは非常にかけ離れ、大きな不安と不吉な予感がしました。やがてキャンガンも爆撃に遭います。北へ向かって逃避行が始まりました。

もちろん、日が落ちてからの行動です。暗闇のお陰で爆撃の跡の悲惨な光景が目に入らなかつたことはせめてもの救いでした。後で聞きましたがそれはもう地獄絵図であつたそうです。大木の枝々にまるで「ナンカ」の実のように（ナンカとは果物で、その実は大きいものは新生児ほどの大きさです）、爆死したちぎれ

ちぎれの人間が、多数ぶら下がっていたそうです。夜が明けると空襲を避けて木陰に身をひそめます。飛行機の音がしたら動くなど教えられました。ひそひそ話の声も立ててはいけません。敵の機器は小さな音もキャッチする。皆の命にかかわるのだ。エトセトラ、エトセトラ。もうこんな明日も分らない、しかも、人間が生きて行く条件の最低の衣食住さえゼロの：死んだ方がうんと楽だ：。私も神経がおかしくなったかかと自己反省したりいたしました。

水牛が幾頭か溺死している泥沼を腰の辺までつかりながら、やっと邦人たちの集まっているバクダンの教会へたどり着きました。野宿、また野宿の連続の後だけに、今日は屋根のある場所が寝ぐらかと、その嬉しさと束の間の安堵の気持ちだけが先行し、なぜか年老いた母や、強度近視なのに眼鏡を失くし、その行動は半分盲目の人のようだった義姉と、その幼い子たちがこの行路にいかにか難儀しているかとの思いやりの気持ちになった記憶がないのです。

今、顧みると、やはりあの時は常軌を逸していたの

でしょうか。普通の状態の人であることの方が無理だったのか、囲まれた環境の良し悪しで人間、簡単に駄目になるのでしょうか。今となっては悔いても何の意味もないのですが、五十年も経た今、なお後悔の連続です。

あの噂の恐怖の吊り橋にも、遭遇しました。記憶をたどりますと、その日は珍しくよく晴れていました。だから坂とはいえ、山の中腹を登る山道は、一生懸命歩いても一向にはかどりませんでした。しばらく進むと道は突然ブツリと切れていました。仕方なく右手の岩を越して周りを見ると、そこには顔半分を失った頭蓋骨があり、白骨化した死骸が横たわり、ドキリとしました。そしてそこにうずくまっている人、泣きながらうごめいている人、茫然自失している人がいました。なぜこの人たちは、こんなところで、こんな姿でいるのかしらと、辺りを見回すと、下手に、思わず身震いするような吊り橋が、深い谷川をへだてて向かいの山の中腹に架かっているのです。この吊り橋を渡れず、ためらって、たむろしている人たちでした。

そして、そこに転がる屍は、ここまでたどりついで精根尽き果て、餓死した人たちだったので。身の軽いイゴロットさえ、五十人に一人は落ちると噂されていたアシン溪谷の吊り橋がこれだったのです。

私はそのとき、ただ茫然自失となっていたので、この吊り橋をどうして渡ったのか、あまりの恐怖のため、覚えがありません。気がついたときはアシン河の水辺をとぼとぼ歩いていました。やはり同じぐらいの体力の人々が、前や後ろにおりました。時々この人たちの姿が見えなくなって心細くなり、力をふりしぼって速度を早めたり、時には小休止して後続の人を待ったりの行軍でした。

途中、恐ろしい話を耳にしました。それは小高い山道に腰を下ろして一服していた兵隊さんが、後ろから軍刀で切りつけられ、藪に引きずり込まれて、危うく肉をそがれるところを蹴倒して逃げて来たとか、そして、その藪の中には、新しい人間の死体や、古くて腐りかけた人間の死体があって、どれも口唇部や頬の肉、大腿部をそぎ取られていたということです。この人肉

を狙う飢餓兵群の噂は、単なる噂ではなく事実であったと思います。

私は、南米のアンデス山脈で遭難事故を起こした航空機に乗り合わせたスポーツ選手たちの、いかにして生き延びたか、の手記に、決して目をそむけたり、耳をふさぐことはしませんでした。あの北ルソンの逃避行での極限の体験をしている者にとって、それはうなづけることでしたから。

私たちの食物は、初めのうちこそ共同炊事でしたが、徐々に、各人で調達しなければならなくなりました。お米は軍に付いていけば、配給はありましたが、それも搗いたお米から粳となり、搗くことができてお米が炊ければまだよいのですが、時には粳のまま口にくわえ、小鳥のように歯で殻をむき、かみしめるのが精いっぱいということもありました。

生命力のある人は、蛙を取ったりコオロギの腿の肉にも魅力があったり、時々、草の根から転がり出る薄黄色の口をした白い透明な、這う虫のおなかの糞を押し出して空炒りしたのを食べて、これらの小動物から、

貴重な蛋白源を取っていたようです。

かく言う私は、残念なことに、この変化に富んだグルメの経験はないのです。ただ一種類、南方春菊とそれが名付けたのか、日本の春菊よりも、もっとアクの強い野草はいただきました。昔から飢えを凌ぐ表現に、木の根・草の芽をかむといいますが、そのとおり身を守ったのでした。木の根もかみましたが、土を掘る道具も、体力もなかったので、葉先だけを摘んだのでした。

私は肉親が、死にゆくことをここで全部を述べることはとてもできません。ただ母の死については：アメリカの飛行機がピラをまいた八月十八日で、その終戦を知らせるピラをちょうど苦労しないで拾うことができなかったので、母に読んで聞かせました。まだ精神はしっかりしていて、「何としても生き抜いて日本へ帰りなさい。本籍地は、ちゃんと言えるか」と問います。私と姉は「東京市麻布区筭町百拾参番地」と声を揃えて答えました。ホッとしたような表情を浮かべて静かな美しい最期でした。

世が世なれば、こんな負け戦でなければ、ちゃんとした野辺の送りもできたものをと、母の臨終を見守った次兄、すぐ上の姉、私ども三人は嘆き悲しみました。ドクターの兄は、常々傷を診たり、その他、診察したり面倒を見ていたイゴロツ族の青年に頼み、土地の風習どおりのお墓を母のために造りました。横穴を掘って、屍を横たえ、野の花や、谷川からくんできた水など枕元に並べて、私どもは別れの言葉を涙と共に小さな声でブツブツ言いながら「母さん、きつとお骨を拾いにこの場所へ来ます」と、誓い合いました。イゴロツ族の青年は横穴の蓋を粘土で固めたようなものでピタッと隙間なく封じました。鳥や野獣に害されずにミイラになり、またその後、年月を経て白骨が寝ている姿そのまま残るのだと聞かされました。母の遺体の前で誓いも空しく、遺骨収集など、夢のまた夢の話でいまだ実現できずにあります。

戦争は終わった。もう空襲もない。爆音に恐れおののくことも、もうない。しかし、マニラ脱出から、このホヨの部落までの道程を自力で帰ることができるの

だろうか。北上逃避行の難儀以上のことは恐らくないのだと自らに言い聞かせました。しかし、実際にはこの下山の途中で多数の犠牲者が出たと聞きました。故国へ帰る望みを果たせず逝った人々の無念を痛く感じないではおられません。

キャンガンで米軍の捕虜となりました。散々、怖い話を予備知識として聞かされておりましたが、すべて思い過ごしてました。栄養失調で両足は象のように水ぶくれして重く、二、三センチの段差をさえ片足ずつ両手で持ち上げて歩きました。マニラで開業医でいらしたドクター矢部は「これでは無理だからタンカ輸送にするよう手続きしましょう」と御親切でした。二、三カ所で乗り継ぎして、カンルパンの収容所に一時入りました。

収容所も転々とさせられました。最終はモンテンルパでした。私と姉を見て「よく生きていた」と知り合いのだけ彼となく、手を取り涙してくれました。私は自分では「生きていた」のではなく「生かされてきた」と今でも思っています。米軍軍医が盲腸手術跡の

抜糸をしてくれました。骨と皮だけと言うほどやせて、目だけギョロギョロしていて多分中学生ぐらいに見えると思います。子供をあやすように、「ちっとも痛くないんだよ」とか、「すぐ済むからね」とか優しいドクターでした。三度三度の食事や飲みもの、雨露に濡れずに住むねぐら、空襲のないことの精神的な安らぎなどで、少しずつ元気になっていきました。

いよいよ日本へ帰る日がきました。「海防艦十四号」と言う名の、郵船や商船よりもずっと小型で、ごつい感じの船で乗組員は元海軍さんでした。マニラ湾を出航してバシー海峡へ出ると、艦は文字通り木の葉のように、前後左右上下と大ゆれでした。甲板にはロープがあちらこちらしつかりと渡されていて、必ず強くつかまって歩くよう言われました。顧みると十二歳のとき、日本の女学校教育を受けるため、この同じ航路を大阪商船のメキシコ丸に乗っての船旅だったことを思い出しました。

夕食が終わるとデッキに出て日本の歌を波音に負けじと歌い叫びました。「夕焼けやけ」「証城寺の狸唯子」

「花嫁人形」などの童謡や小学校唱歌の「ふるさと」「砂山」「荒城の月」そして水兵さんも加わって、「炭坑節」「黒田節」などの節のつく歌を。今まで、歌うことのなかった反動でしょうか、のどが痛くなるまで歌いました。一週間か十日目ぐらいで、鹿児島島の南の島々が肉眼で見えてきました。皆、甲板に出て大泣きました。十一月だというのに島は緑色に見えました。

この引揚船で後に嫁、姑の間柄となる北島れい、金貨メリヤス株式会社社長夫人とその末の子息、当時、幼稚園児ぐらいの、準四郎氏と一緒にした。十二歳のときの日本行きの船旅も、北島れい夫人とその家族と一緒でお世話になったことなど思い起こし、何か因縁のようなものを感じました。

引揚船の専用港だったのでしょうか、加治木港に上陸しました。昭和二十年十一月十三日でした。その日から、敗戦国の外地引揚者としての別の苦難の道が始まりました。

引き揚げてからの種々の苦労は、北ルソン山岳地帯での逃避行の極限的な苦労と比べて見るならば、変な

表現ですが、楽な苦労であったと思います。戦後五十年、振り返ってみて、この決して短いとはいえない年月を歩みくることのできましたことは、命懸けの逃避行で得た様々な体験があったからだと思います。命の糧となった春菊の葉、そしてのどの渇きを救ってくれたアシン河、谷のせせらぎに私も心からの感謝の心を捧げます。

この戦による功罪を考えると、かろうじて生き残ったからこそ言えることは、衣食住ゼロの極限の日々の中で体験して得たサバイバルのための知恵、忍耐は貴重なことです。トイレットペーパーが品薄になったからとオタオタもせず、冷夏で米不足になろうともオロオロもせず、普通の気持ちでおられたこと。片や戦の大罪は、多数の人命を失ったこと。北ルソンの山々で、無惨な死を遂げなければならなかった同胞たちに、心よりの御冥福を祈ります。

幾度か慰霊の度、巡礼のツアーを重ねようと、何の免罪符になりましょうや。死ぬまで、背や肩に十字架は重いのです。

### 【執筆者の横顔】

北島華江さんは、フィリピン群島マニラ市で禅宗曹洞宗南天寺の御住職でおられた東賢隆氏を父君に願様を母君に六人姉妹の末っ子として生まれました。

当時、学校ではきれいで勉強もよくできるし、学芸会ではいつも主役。私は、一年先輩の南天寺のお嬢様を近寄りが見たい存在としてあこがれをもって見ておりました。

その方が、戦争によって並々ならぬ体験をされ、ルソン島北部の山に退避するため、十三人のご家族が入った。内地の土を踏むことができたのは、たった三人でしたとお伺いしました。本当に筆舌に尽くし難い苦勞をされたこと、その心情をお察しいたしました。

ルソン島の南天寺は植民地マニラで宗教のほかにも大きな役割を果たされていたようです。中でも何らかの理由があるような子女を預かって養育されておられました。我が家でも父三橋信作が土木建築請負業で、比島全土を開拓のため、マニラ在住が少なく、ちょうど小学一年生で仕事の現場で骨折した兄、渡比丸を預

かっていたいただいたのを子供心にも覚えております。そのころ華江さんの父君はすでに亡くなられ、長兄の賢重氏（現地召集で戦死）が後を継がれていたようですが、そのころ賢重氏や次兄信隆氏に活動写真（映画）を見せていただいたとか、初めて見た映写機の印象が深く、それ以来機械の魅力にとりつかれたとか兄は語っております。

由緒あるお家柄のお生まれなのに様々な苦勞にもめげず、確たる信念をお持ちで、マニラ会その他の会で信望を集めておられます。

今では、御子息様の御家族に囲まれてお幸せに暮らしておられます。

毎年、夾竹桃の花を見ると、マニラの南天寺のお庭に咲いていたのを思い出します。

（東京都引揚者団体連合会

常務理事 大平 禮子）